



理系大学院修士学生就職活動の一例 ～なんとなく悟ったことみたいな～

荒木淳吾
医科学研究科

「当社を志望した理由を述べてください」

このフレーズ何度見聞きしたことか。就職活動といえば、この質問(?)に必ず行き当たります。この単純な問いに対して、学生側は気に入られようとあの手、この手の策略を練り、就職へと挑みます。

僕が、初めてこの質問に答えたのは、11月頃でした。本格的に就職活動を始める前に練習も兼ね、リクナビ(リクルート社が運営するweb上の就職サイト)でとりあえずS社に“エントリー”をしました。後日S社からの返答メール(e-mail)の中に“それ”はありました。

「11月8日までに研究概要と志望理由を送付してください。」

さて、どのように答えるか? だいたい、志望する業界はあっても、「その会社を志望した理由」っていうのはあるのか? ただ安易に大企業を選んでエント

リーした僕としては、“その会社”を選ぶ特別な理由などはありません。そのため、とりあえず、体裁のよい言葉を並べて志望理由を書き、研究概要を添え、ポストに投函し、合否を待ちました。

就職の合否というのは、合格の場合、書類締め切り日(もしくは試験日)から2週間以内に電話もしくはメールで通知が来るようです。それでは不合格の場合は? 不合格ならば無情にもなんの音沙汰もないというのが常識なようです。ちなみにこのS社から返答はなく多分(;;)不合格だったようです。

<研究職を求めて>

僕の志望は化粧品業界での研究職です。化粧品というとアパート1階の売場を想像する方も多いでしょう。一見、就職候補となる会社も多いように思われます。しかし、あの売場に並んでいる化粧品のほとんどは外国産(つまり外国で研

究されている)です。実際、日本で研究開発され販売されている化粧品は数える程しかなく、求人を行っている会社数も20社程度です。また、研究職に就くことができる院生数は限られており、単純に100倍近くの倍率になることもあります。

当然、研究職に就くためには、少ない椅子を争わなければなりません。そのため、その業界に興味があるかどうかは別にして、“仕方なく”僕は、応募する業界を比較的活動時期が早い製薬業界まで広げ活動していました。

文章中“エントリー”なんていう言葉を聞いて「何それ?」という方もいると思います。エントリーするということは企業からのいくつかの題目に対し、制限文字数などに注意しながら、答えを企業に提出することを指します。企業はこの書類(エントリーシート)を用いて書類選考を行います。このエントリーを通過できないと会社説明会に参加することすらできません。

また、近年の就職活動(資料請求・エントリー等)の開始は、インターネットで行われることがほとんどです。少なくとも大手企業に関しては、インターネット上のエントリーを要求するところがほとんどです。

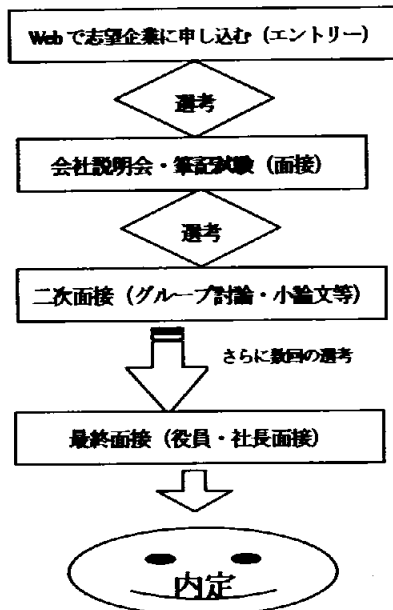


図 一般的就職採用の流れ

図に一般的な就職活動を示しました。この文章を読んでいる方の中には、「理系の院生って教授のコネで企業に行けるんじゃないの?」と思っている方もいるでしょう。たしかに一部でそのように求人を行っている企業もあります。しかし、年々少なくなってきており、いわゆる推薦を用いない“自由応募”が多くなっています。

<色々考えたりして>

僕自身の体験談に戻ります。初めて、

会社説明会に行ったのは12月の暮れの化粧品N社でした。銀座にあるその会社の受付にいた女性の綺麗さに「さすが化粧品会社」と妙な感心をしたと同時に、手に汗をにじませ会社説明会を受けたことを憶えています。

一次の筆記試験の結果が良かったのか、二次面接に呼ばれました。面接官は二人。志望理由などの質問から始まりました。話をしているうちに、その会社独特の給与体制（年俸制）に不審な点を感じ、仕事の面でも何か「使われる」様な雰囲気が見え、それに従い、自分自身の受け答えもごちなくなるのがわかりました。しかし、「この疑問を口にしたら嫌われる（不合格になる）のでは？」と、気弱になり、質問をぐっとこらえ、釈然としない気持ちを抱きつつ面接を終えました。また、同時期に行われたK社の二次面接においても、自分がやりたい研究・仕事をやれるかどうか疑問を持ちながらでしたので、中途半端な受け答えとなってしまいました。

志望理由を書くとき、どういうことを書けばいいのでしょうか？志望する企業にあわせ志望理由は変化させるのでしょうか？

1月も終わりに近づいたころ。上述のN・K両社共に不合格。保険のような甘い

気持ちで出した製薬会社への履歴書への返答は一通も帰ってこない（不合格）こと。その一方で、自分が強く志望する化粧品業界はほとんど一次選考を通過している事実。

これらは、正直に自分を表現するべきだということを示唆しているように感じられました。熱意という古くさいかもしれませぬ。しかし、自分がやりたいことをしっかり述べ、それを受け入れてくれる（そういう自分を欲している）会社を探して就職活動をした方が、僕と企業共に気分が良い就職活動になると思うようになりました。

就職活動に関して、そんな悟りが開けてきた時期のP社の面接。面接官には、自分がやりたいこと、自分にはできないこと、仕事上譲れない点を包み隠さず伝え、P社商品に対し僕が好きではない点も述べました。その結果、三次面接も合格し最後の10人まで残ることができたのです。最終試験（なんと1泊2日の合宿）では残念な結果となってしまいましたが、自分としては「正直な自分を見てもらえた結果」としてある意味満足しています。

Y社採用試験も印象深かったです。3月の中旬におこなわれた会社説明会のことでした。僕は会社側から持参するよう

に言われていた「顔写真」を忘れてしまい、苦肉の策として顔写真を添付する欄に「自画像」を書いてみました。僕としてはもう開き直ったところがあり、「この程度のことで、採用しないならこっちから願ひ下げだ！」と思ひ、20分かけて書いたその自画像付きの履歴書を面接官に渡し、家に帰りました。

すると見事「一次選考合格」の通知。後日二次選考の際、面接官は、「君はこの似顔絵で一次選考を通過したようなもんだからね」と笑いながらおっしゃっていました。約900人から18名に絞る段階で「似顔絵」が人事担当者の目にとまり、その大胆さに「こいつは面白そうだ」と思っただけだそうです。Y社も最終選考10人まで残りながら不合格となりましたが、熱意を伝えることが大切であるということは、事実(?)だと思います。

<実験と院生と就職と>

いくら就職活動とはいえ、それにかかりっきりになるわけにはいきません。理系院生は「実験」をするという使命があるのです。「就職活動ばかりして実験が進まなくてボス(指導教官)が怒っているんだ」と、いうのは院生間でよく聞く言葉です。幸い僕が所属する研究室で

は、実験については自由にやらせてもらえ、好き勝手に就職活動もさせてもらっていますが、多くの院生の友人は「指導教官と就職活動の板挟み」となっているようです。たしかに、指導教官にしてみれば、実験を犠牲にして、就職活動に力を注ぐ院生に対していらだったり、不安に思う向きもあるのでしょうか。しかし、僕のまわりの友人を見る限り自主的に実験に取り組んでいますし、研究に対しても真摯です。

ぜひ、教官の方々には、少しでも就職の現状を理解いただき院生の就職活動にもう少し理解をしていただければと思います。

<そういえば...>

なんだか、偉そうな・思わせぶりの文章を書いているにもかかわらず、僕の就職は未だ決まっていません。インターネット上でエントリーした企業は50社、実際に会社説明会に参加した(参加できた)企業は、10社程度です。今、自分自身の就職活動を振り返れば「エントリーする企業をもっと多くし、会社説明会にも積極的に出席するべきだった」などの反省点はあります。ただ、研究やセミナーとの両立を考えると、自分が処理できた会社数はこれが精一杯でした。

院生の就職活動を総括できる身分ではないのですが、この半年間の就職活動を通し、僕は自身を見つめることができたと同時に一つの事に気付きました。

よく、就職活動をしているとよく「その会社との縁」という言葉を耳にします。なんだか曖昧な言葉で、聞いた当初、気に入りませんでした。しかし今では理解できます。きっと就職というのは、別に一番優秀な人がその会社に採用されるわけではなく、「その人の個性とその会社がほしい個性があったとき」に採用が決まり、それを「縁」というのだと思います。

今は、まだその「縁」が僕には回って来ません。そのうち良い縁で結ばれるこ

とでしょう。いや、結ばれるはずです。

... とはとっても、実際問題やはり困っているわけで。先生方のまわりでどこか就職口はありませんでしょうか？

僕の略歴を述べると、生命科学が好きで、疫学もちょっぴりかじって、紙飛行機づくりが趣味で、コンピュータプログラムも（少し）書けて、ついでに肩もみが（すごく）上手です。

興味がありましたら、メール (mm003681@md.tsukuba.ac.jp) ください (^_^; 良縁待っています。

それではっ（コーヒーを飲みつつ）

2001年4月大安

(あらきじゅんご)

